



book 017

## 星野博美

読まずにはいられない

日常と非日常、  
自由と家族の狭間で

表紙を飾る、古びたサーカス芸人の写真。タイトルの衝撃。革命を象徴する赤色。頁を開く前から胸がざわつくのを抑えられなかった。

著者は大学在学中にロシア・アヴァンギャルドの虜となり、卒業後はサーカス・プロモーターとして活躍する人物だ。そんな著者がソ連崩壊直前、革命後のソ連に残った3人の日本人サーカス芸人の写真と出会う。そこから、海を渡った彼らの足跡を追う壮大な旅が始まるのだ。

3人の行方については本書

を読んでものお楽しみとしよう。驚かされたのは幕末、数多くのサーカス芸人が海を渡り、日本の伝統芸やグロテスクな「ハラキリショー」を披露し、

人気を博していたことだ。彼らは国境や国籍といった、人間の作った境界線をやすやすと飛び越え、芸だけを武器に世界のどこへでも出かけていく。歴史の表舞台には登場しない無名のコスモポリタンたちの心根の自由さに興奮し、喝采を送りたくなった。

しかし次第に印象は反転していく。土地に縛られないこ

とを「自由」とするならば、確かに彼らは自由だ。しかしそれは芸人として生きるために身に着けざるを得なかった自由であり、その代償として、国や共同体の保護を受けられない立場に立たされる。

心底悲しくなったのは、戦争や革命をくぐり抜けて帰国した芸人も多くいた中、帰らなかった芸人は、あるいは帰れなかった芸人は、ほぼ全員が現地

で家族をもうけていたことだ。旅の一座から離れ、家族で細々と芸で生計を立てる彼らに凜清の嵐が襲いかかる。旅回

## 『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』

大島幹雄著

(1600円+税/祥伝社)

明治時代に海を渡って世界で活躍した日本人サーカス芸人がいた。芸人たちの足跡をたどりながら、当時海外で最も有名だった「ヤマダサーカス」の全貌に迫る

photo 写真部・関口達朗

りを宿命づけられた芸人が、旅より家族を選んだことで国家に縛られる。これほど無念なことがあるだろうか。

なぜ人がサーカスに魅かれるのか、本書を通してなんとなくわかってきた。日常と非日常の間に張られた一本のロープの上を綱渡りしていく彼らは、私たちにはけっして見られない世界を見ている。しかしこちらの世界へ戻る道もまた綱渡りであることを、私たちは予感している。だからこそ彼らに憧れ、恐れるのだろう。サーカスが物悲しいのは、必然なのである。

サーカスに身を捧げる人に対する愛がまった本だ。

ほしの・ひろみ・1966年生まれ。写真家・作家。「怒る香港に若は生えない」(鳥へ免許を取りに行くと)など著書多数。「コンニャク屋漂流記」で第63回読売文学賞を受賞。最新刊は「戸越銀座でつかまえて」。